SPARC Japan セミナー2019 特別編

「オープンアクセスの今とこれから～ステークホルダーの戦略とともに考える～」

学術情報流通推進委員会（SPARC Japan）について

武田 英明

（国立情報学研究所 / 学術情報流通推進委員会委員長）

講演要旨

SPARC Japan は、日本発の学術雑誌、特に英文論文誌を電子化するとともに、これらを安定的に発信できるビジネスモデルを創出し、日本の学術雑誌の海外への認知度を向上させることを目指して、2003 年にその活動を開始した。2010 年頃より、「我が国の特色に見合ったオープンアクセス（OA）を実現する」をかかげ、学協会との連携に加えて図書館にも軸足を置き、アドボカシー活動（セミナー）、国際的な OA 活動との連携・協力を行ってきた。2018 年度にこれまでの活動を見直し、オープンアクセスやオープンサイエンスに係るステークホルダー間の連絡調整を行うことによって、学術情報流通基盤整備を推進するという役割に舵を切ることとなった。それに伴い今後は、活動主体の名称も国際学術情報流通基盤整備事業運営委員会から学術情報流通推進委員会へと変更して活動を継続する。

武田 英明

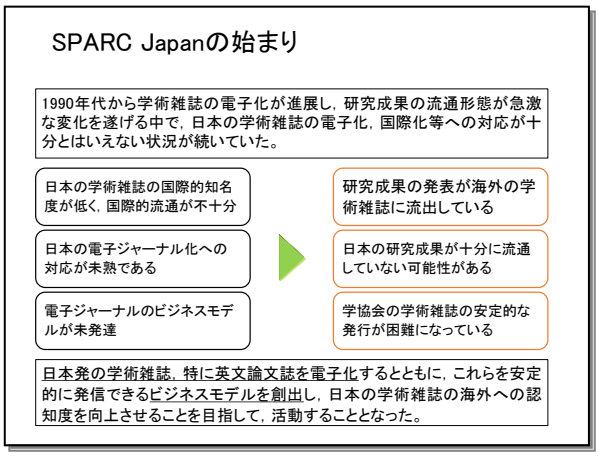
https://www.nii.ac.jp/faculty/informatics/takeda_hideaki/

SPARC Japan 委員会、学術情報流通推進委員会の委員長として、SPARC Japan の活動のこれまでと現在をご説明したいと思います。

SPARC Japan の始まり

SPARC Japan の活動は 16 年前の 2003 年に正式に始まりました。そのころはまだオープンアクセスという言葉自体が多くの理解を得られていませんでした。世界では、既に 2000 年あたりでオープンアクセスが学術の方向であるということが明確に打ち出されていましたが、国内ではまだそれが認知されておらず、ではそれを具体的にどうやっていくかということで、特に当時、問題になったのはジャーナルでした（図 1）。

一つは、オープンアクセス以前に日本のジャーナル、パブリッシングが非常に国内で孤立していて国際認知度が低いという問題と、電子ジャーナル化がこの時点で非常に遅れていたということがありました。それから、電子ジャーナルをどうビジネス化するかという問



（図 1）

題への対応も遅れていました。世界の電子ジャーナル化の兆候の中で、われわれの国内問題として考えたときにこういう問題があり、実際それによって、研究成果が海外のジャーナルに行ってしまっている、国内の研究成果が十分に流通していない、電子ジャーナル化に従って学協会の学術雑誌の出版が困難になってきているということで、このあたりを考えていこうと SPARC Japan が始まりました。

学協会等とのパートナーシップ

SPARC Japan は文部科学省のご支援を頂いて、特に国内学協会の電子出版を支援しようという事業の側面が大きく打ち出されました（図 2）。国内の学術雑誌から 45 誌を選定し、これを国際電子ジャーナル化することを一つの目標と掲げています。また、ライセンスやビジネスモデルの検討が始まりました。

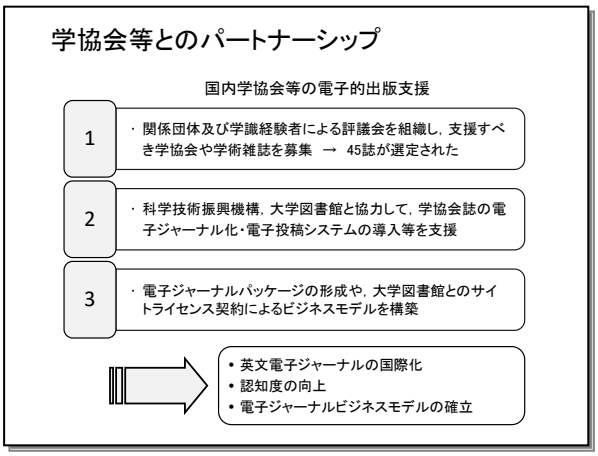
これまでの活動概要

16 年前に始まって以降、3 年ごとに 1 期、2 期と、5 期まで続けてきました。ただ、正確に言うと 3 期までは事業としての電子ジャーナル化支援を行ってまいりましたが、実は 3 期で事業としての活動は終わっています。一方で、プロモーションやセミナー開催、ニュースレター作成、国際連携という活動はそこそこ順調に回っていたので、電子ジャーナル化支援の事業そのものは終わりましたが、セミナーや国際連携の部分を中心に 4 期以降は運営してきました。当初の目的は 3 期までで終了しており、2 期以降にセミナーなどの活動を始めて、どちらかというと教育普及という問題に関して貢献してきたと思っています。

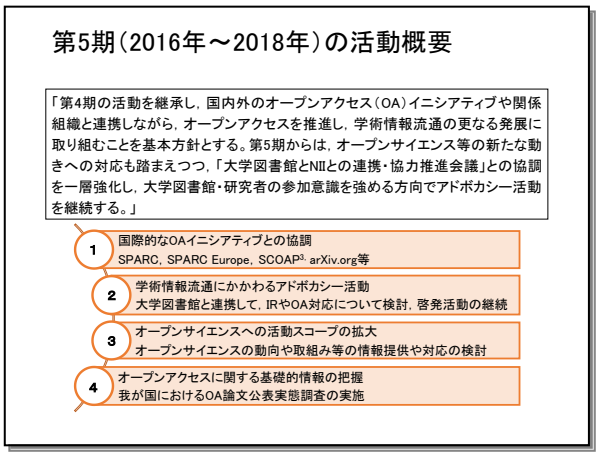
図 3 は去年までの第 5 期の状況ですが、この時点でオープンサイエンスという言葉が少し入ってきて、オープンアクセスがさらにオープンサイエンスにつながっていくという道筋を確認しています。ここでさらに問題が複雑になってきました。今まで対象がジャーナルとそれを支える図書館の関係だったのが、オープンサイエンスがダイレクトに入ってきたのです。

新しいフェーズに向けた検討

先ほどから SPARC Japan 委員会と呼んでいるものは、実は NII の中では、正確には国際学術情報流通基盤整備事業運営委員会という非常に長い名前でした。これは初期の目的がまさに国際電子ジャーナルを作るということだったためですが、もう名前が活動を表現していないということで、昨年、第 6 期に向けて議論したときに、われわれは、むしろいろいろなステークホルダーが集まってオープンアクセスの活動について議論する場、そしてそれを広く普及していく立ち位置にいるのではないかということを再確認して、名称を学術情報流通推進委員会に変えました。オープンアクセスを学術の世界で普及化させていく、推進させていく一つの軸になれたらいいということで、そのように位置付けを定義し直しました。



（図 2）



（図 3）

学術情報流通推進委員会

図 4 が、改めて再定義した学術情報流通推進委員会の基本方針です。学術論文のオープンアクセスは当然であって、さらにそれはオープンサイエンスにつながっていくという状況を確認し、第 6 期を改めて第 1 期と再定義しています。第 1 期としては、まずはオープンアクセス・オープンサイエンスの推進のために国内外の学術情報流通の動向や実態の把握に努め、それに基づいた学術情報の公開や利活用に関する戦略の検討と調整・アドボカシーを行っていくという立ち位置に変えました。特にアドボカシーは、ずっとセミナー等の活動をしてきたことも踏まえて、こういうものは国内でどこかがするべきであり、これまでの 15 年の実績から、それをするのは自分たちがふさわしいと考えました。

図 5、図 6 は活動内容です。まず、国内のステークホルダーと協調するということです。今まで大学図書館の方々が委員となって活動を支えてくれましたが、今回からはそれに加えて国内のオープンアクセスに関わるステークホルダー、さまざまな組織や活動の代表の方に委員になっていただき、オープンアクセスのオールジャパンとしての議論の場をつくるというふうに変えました。これが国内の問題です。

もう一つが、国際協調に係る戦略の検討です。国際的な活動はわれわれのかなり先を行っています。例えば SCOAP[3] や arXiv、CLOCKSS といったオープンアクセスを支えるグローバルな活動があります。各大学などが個別にそういう活動に参加するのは構いませんが、日本の大学が、特に国際的な活動に個別で入って活動することはなかなか難しいということは、われわれの経験上分かっています。そういうことに対して、これもオールジャパンとしてコンソーシアムをつくる形で国際協調にきちんと入っていくということをしています。これは過去の SPARC Japan の委員会からずっと行ってきたことです。SCOAP[3] は高エネルギー関係のジャーナルのオープンアクセスの活動です。これはお金も絡む話で、多くの大学の協力を頂いて、それを取りまとめてコンソーシアムとして NII が交渉したり議論に参加したりしています。arXiv も同じですが、こちらはプレプリントサービスです。元々物理系だったのですが、今は情報系、経済系、統計なども入ったプレプリント・サーバーとして有名なサービスになっています。これは大学からのお金で運営しており、その国

学術情報流通推進委員会の基本方針

- 近年の情報通信技術の進展に伴い，学術論文のオープンアクセスに加えて，研究データを含めた研究プロセスのデジタル化と共有に取り組む，オープンサイエンスが国内外で進展しつつある。
- 学術論文や研究プロセスの相互利用の促進は新たな知の創出にも資することから，学術情報流通推進委員会の 第1期においては，オープンアクセス，オープンサイエンスを推進するために，国内外の学術情報流通の動向や実態の把握に努め，それらに基づいた学術情報の公開や利活用に係る戦略の検討と 調整，アドボカシー活動等を，学術コミュニティ等を中心としたステークホルダーの参画や連携のもとに行う。

（図 4）

活動内容（詳細）

1. 国内ステークホルダーとの協調

「大学図書館と国立情報学研究所との連携・協力推進会議」，JUSTICE，JPCOARはもとより，学術コミュニティのステークホルダーを広く結集して，学術情報流通に係る国内外の動向や実態の把握，学術情報流通のあり方に係る意見交換を行う。

（具体的なアクション）
- 学術情報流通推進委員会を開催し，ステークホルダーと情報を共有する。
- 国内外のオープンアクセス・オープンサイエンス推進のための戦略を検討する。

2. 国際協調に係る戦略の検討と提言

SPARCと連携して諸活動を展開する他，学術情報の公開や利活用を促進する国際的なイニシアティブに対応する国内コンソーシアムを支援する。当面はこの機能を維持するものの，国内コンソーシアムの自立的運営も促す。また，国内の学術情報流通に係る現状を踏まえつつ，国際的なイニシアティブへの対応に係る戦略を検討する。

（具体的なアクション）
- 国内コンソーシアムとともに，国際的なイニシアティブの窓口対応（参加の取りまとめや会費の支払い等）を行う。

（図 5）

活動内容（詳細）

3. アドボカシー活動の実施

学術情報流通に係る様々なステークホルダーを対象に，国内外における動向や実態，研究分野における特性等も踏まえて，学術情報の公開や利活用の推進に向けたアドボカシー活動を行う。

（具体的なアクション）
- SPARC Japanセミナー企画 WG を設置して，当該年度に開催するセミナーを企画する。
- 学術情報流通に関するトピックを選び，それに関する情報提供を行う。

4. 学術情報流通の動向に係る調査の提言

我が国における学術情報流通のあり方を検討するために必要な，国内外の学術情報流通の実態・動向に係る調査の提言を行う。また，実施された調査結果の共有を図り，それに基づいたステークホルダーの役割や連携の在り方についても，提言を行う。

（具体的なアクション）
- OA2020 に関する国内の学術情報流通に係る調査を企画・提言する。
- 提言に基づいて得られた調査結果の共有を図る。併せて，それに基づいたステークホルダーの役割や連携の在り方についても，提言する。

（図 6）

内の取りまとめもしています。

あとは、アドボカシーです。ずっとセミナー等を開催してきており、そういうことを継続するということです。

それから、調査も行ってきました。特に JUSTICE と連携して国内でのオープンアクセスの事情、最近ですと APC がどうなっているか、実際に国内の大学から APC に一体幾ら払っているかという問題を調査してきています。

まとめ

このように、SPARC Japan は日本発の学術雑誌、特に英文論文誌の電子化から始まったのですが、今はむしろオープンアクセスを国内で推進していくために、われわれはそのエンジンになるのではなく、皆さんが活動できる場、議論できる場をつくり、活性化をするという役割の委員会として、今年から名称を改めて取り組んでいます。今日はセミナーの特別編という形で、普段はいらっしゃらない方も含めて SPARC Japan の活動を知ってもらうと同時に、オープンアクセスの今とこれからについて一緒に議論していけたらと思っています。